

固有名は述語か ― 日本語の場合

峯島 宏次
お茶の水女子大学

和泉悠 『名前と対象 ― 固有名と裸名詞の意味論』 合評会
日本大学文理学部
2017 年 2 月 11 日

話の流れ

1. 和泉 (2016) の述語説を紹介する (p.3 – p.7)
2. 問題点と疑問を提示する (p.8 – p.20)
3. 別の見方を示唆する (p.21)

モンテーニュ「名前について」

次のことは小さなことだが、珍しくもあり、しかも目撃者が書いていることなので、記憶に値する。すなわち、イギリス王ヘンリ二世の王子、ノルマンディー公ヘンリがフランスで宴会を催したとき、集まった貴族があまりにも大勢だったので、慰みに、似た名前によって幾組かに分けてみたところ、一番はギヨームという名前で、この名前の騎士が食卓に百十人も坐っていた。しかも、ただの貴族や従卒は勘定に入れずにである。

『エッセー（二）』（岩波文庫、原二郎訳、118頁）

歴史では、三人のソクラテスと五人のプラトンと八人のアリストテレスと七人のクセノフォンと二十人のデメトリオスと二十人のテオドロスがいたことが知られている。（124頁）

述語説 (Predicativism)

固有名は普通名詞（一般名）の一種である。普通名詞「犬」が

x は犬である

という複数の対象に当てはまる述語であるのと同様に、固有名「アリストテレス」は、

x は「アリストテレス」という名前をもつ

という複数の対象に当てはまるメタ言語的な述語である。

- x is given the name 'Aristotle' in an appropriate way (Burge 1973)
- x bears the name 'Aristotle' (Katz 1977, Bach 2002)
- x is a referent of /æristatɪ/ by virtue of the naming convention R
(Matushansky 2006)
- x is called Aristotle (Fara 2015)
- x は音 /æristatɪ/ と名前の関係に立つ (和泉 2016)

固有名のさまざまな用法

和泉 (2016) によれば、述語説を採用すれば次の三つの用法は容易に説明される。(各用法の例については、別紙「固有名の用法」を参照)

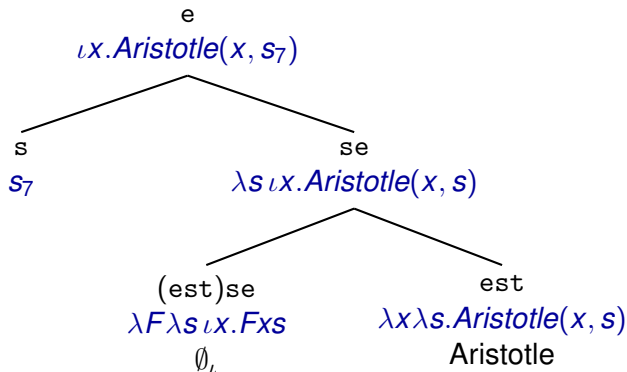
- C. 普通名詞的用法
- D. 総称的用法
- E. 時間・状況限定的用法

述語説によれば、これらは固有名が字義通りの意味で使われる用法である。

- また統語論・意味論で独立に支持されている仮説と組み合わせることで、A. 指示的用法と B. 束縛的用法も自然に説明されると言われる。
- これにより、固有名のさまざまな用法に「統一的な分析」を与えていることが述語説の大きな利点のひとつとされる。

項位置の裸の固有名 — 英語の場合

- 項位置の裸の固有名は、状況変項を伴う不完全確定記述である (Elbourne 2005, 和泉 2016)

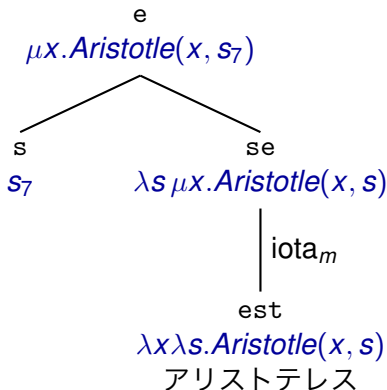


$\iota x.Aristotle(x, s_7)$

状況 s_7 で 'Aristotle' という名前をもつただ一つの対象

項位置の裸の固有名 — 日本語の場合

- DP 仮説を採用せず、型変換に基づくアプローチをとる (和泉 2016:Chap.5)



$iota_m = \lambda F \lambda s \mu x.Fxs : (est)se$

$\mu x.Aristotle(x, s_7)$

状況 s_7 で「アリストテレス」という名前をもつ最大の対象

I. 時間・状況限定的用法の扱いについて

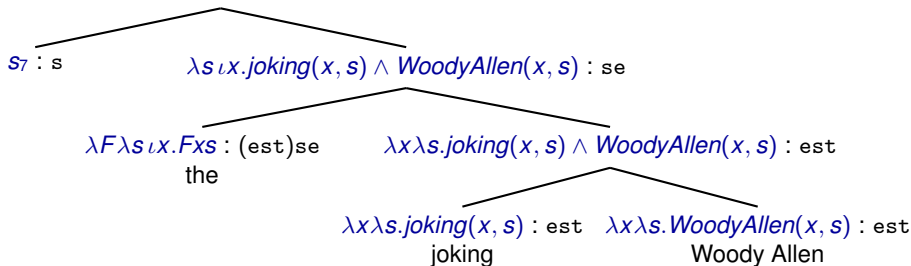
1. The joking Woody Allen is funny.

「冗談を言っているウディ・アレンは面白い」

[1.] における表現 *Woody Allen* は個体定項・変項としての固有名ではなく、メタ言語的な普通名詞であるがゆえに、確定記述 *the joking Woody Allen* を構成することができるのだ。(和泉 2016:46)

‘The joking Woody Allen’

$\iota x. joking(x, s_7) \wedge WoodyAllen(x, s_7) : e$



和泉 (2016) が予測する解釈 : $\iota x. joking(x, s_7) \wedge WoodyAllen(x, s_7)$

状況 s_7 で冗談を言い、かつ、‘Woody Allen’ という名前をもつただ一つの対象

意図されている解釈 (Paul 1994) : 「冗談を言っているときのウディ・アレン」

$\mu x. joking(x) \wedge x \sqsubseteq wa$

$\mu x. joking(x, s_7) \wedge x \sqsubseteq \iota y. WoodyAllen(y, s_7)$

ただし、 $x \sqsubseteq y$ は「 x は y の時間的部分である」という述語

s_7 で冗談を言い、かつ、ウディ・アレンの時間的部分であるような最大の対象

「 x はウディ・アレンの時間的部分である」という述語は、個体ウディ・アレンを経由して形成されていることに注意

II. 隠喩的用法の扱いについて

和泉 (2016:5) は、Burge (1973) の普通名詞的用法 [用法 C の (3a-d)] と隠喩的用法 [用法 F の (8a-b)] を挙げて、次のように述べる。

[1] こうした固有名の用法を「被修飾的用法」と読んでおく。本書では固有名が、普通名詞と同様、複数のものに当てはまる述語であるがゆえに、このような被修飾的用法が可能となると主張する。

- しかし、隠喩的用法について具体的な説明は、和泉 (2016) では与えられていない。固有名をメタ言語的述語として分析するだけでは、時間・状況限定的用法のケースと同様に、‘George Wallace is a Napoleon’ に誤った解釈を与えてしまう。

さらに註 (p.5) において、

[2] バージ自身はこれらの例 [普通名詞的用法と隠喩的用法] をすべて同じものとして取り扱うが、[‘George Wallace is a Napoleon’] については少し異なった議論が必要である。

と続ける。ここには奇妙な点がある。

II. 隠喩的用法の扱いについて

バージは普通名詞的用法 ('literal use') と隠喩的用法を明確に区別している。

[...] the occurrences of proper names in [(3a-d)] are literal and not metaphoric or ironic. Contrast these uses with the metaphoric use in

George Wallace is a Napoleon.

George Wallace is not literally one of the Napoleons—he has not been given the name 'Napoleon' in a socially accepted way. Rather, he is like the most famous Napoleon in significant respects. (Burge 1973:429)

Literal use contrasts with metaphorical use. Unlike metaphorical uses ('George Wallace is a Napoleon'), literal uses of proper names — whether or not in singular unmodified form — involve application only to objects that bear them. (Burge 1973:434)

III. 普通名詞的用法が伴う「おかしさ」について

少なくとも日本語では、量化表現・数表現を伴う固有名の普通名詞的用法は解釈可能ではあるが、それほど自然ではなく、多くの場合、ある種の「面白い、飾った言い方」という効果が生じるように見える。

例えば、以下の [1] は、固有名「山田」を「山田という名前の人」というメタ言語的記述に置き換えた文 [2] と比べると marked な表現である。

[1] ? 昨日、偶然にも、山田に三人会った。

[2] 昨日、偶然にも、山田という名前の人に三人会った。

しかし、もし固有名が普通名詞の一種であり、字義的にはメタ言語的な述語であるなら、なぜこのような [1] と [2] の違いが生じるのだろうか。

飯田 (2000) の述語説

飯田 (2000) も述語説が日本語に適用可能であると主張する。

「太郎」や「東京」といった固有名そのものは、それぞれ、「太郎」と名付けられた対象や、「東京」に名付けられた対象に適用される一般名である。こうした説明方式は、「馬」とは、馬である対象に適用される表現であるといった通常の一般名に対するそれとまったく変わらない。固有名という一般名の場合には、その適用条件のなかに「太郎」や「東京」といった表現自体が現れてくる点が、特異と言えは特異であるだけである。したがって、固有名を一般名の一種とみなす限りで、Burge の提案に私は賛成である。

(飯田 2000:150)

飯田 (2000) の例

[述語説を支持する] Burge の論拠は結局、固有名もまた量子子をとれるという一点に集約されることになる。そして、[...] このことが日本語の固有名に関して成り立つことはほとんど疑いの余地はない。このことを証拠立てる例をさらに追加しておけば、

(62) 山田はふたりとも欠席だ。

(63) 日本全国には数多くの山田太郎がいる。

といったものが挙げられよう。

(飯田 2000:137)

まず、(63) は次と比べると marked な表現である。

[1] 日本全国には数多くの「山田太郎」という名前の人がいる。

次に、(62) の自然な読みは、「山田」をメタ言語的述語と置き換えた [2] とは異なる。

[2] 「山田」という名前の人はふたりとも欠席だ。

(62) の「ふたりとも」が通常の量化表現（述語を restrictor として要求する量化表現）であるかどうかは疑わしい。

[3] 山田と青木はふたりとも欠席だ。

BCCWJでの出現数

こうした量化表現・数量表現を伴う固有名の用法（普通名詞的用法）はどれくらいコーパスに現れるのか。（コーパス言語哲学！）

- 問題となっている解釈が容認可能であるか否か（内省）
- 問題となっている解釈がどのような文脈で、どれくらいの頻度で現れるのか（コーパス）

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

- UniDic（短単位）による品詞タグ付け
- コーパス・サイズ（延べ語数）
 - 全体：1 億 491 万語
 - 普通名詞：2983 万語
 - 固有名詞：265 万語

BCCWJ (続き)

	出現数	
	N : 固有名詞	N : 普通名詞
すべて+の+ N +が	1	1,833
すべて+の+ N +を	1	2,000
すべて+の+ N +に	1	1,760
すべて+の+ N +は	0	787

* 「すべて」「全て」「総て」等々を含めるため、語彙素「全て」で検索

X : 数詞	出現数	
	N : 固有名詞	N : 普通名詞
X +人+の+ N +が	12	1,748
X +人+の+ N +を	2	1,108
X +人+の+ N +に	4	691
X +人+の+ N +は	2	403

- 固有名詞の出現数には解析エラーも含まれる（例えば「すべての里子が」の「里子」の品詞が固有名詞になっているケース）。
- 固有名詞の全出現（23 件）を確認したところ、メタ言語的述語の解釈に相当する事例はなかった。

興味深い例

- [1] だがコーンズ&カンパニーでは、ディーラー車であるなしに関わらず、すべての フェラーリ を受けつけてくれるとのこと。
(LBf5_00020)
- [2] 「憎悪の連鎖」から「百人の ビンラディン が生まれる可能性がある」と語ったエジプトのムバラク大統領の危惧。
(LBr3_00024)
- [3] それを聞いたゲシュタポのミュラー司令官は、「もし我が軍に五十人の アイヒマン がいたら、この戦争は勝っていただろうに」と感嘆したそうだね。
(PB29_00075)
- [4] 江川 が三人いても勝てないチームもある。
(OB2X_00350)

[1] はメトニミー（用法 K）、[2] は隠喩的用法（用法 F）だろうが、反事実的な条件文に現れる [4] の「アイヒマン」と [5] の「江川」は何だろうか。

- [5] このエレベータは 小錦 があと 10 人乗っても壊れない。
(川添愛による例; 戸次大介 p.c.)

IV. 名前導入的用法について

述語説が正しいとすると、固有名が「 x は N という名前をもつ」という述語として字義的に使用される構文が可能であるはず。その候補として、普通名詞的用法の他に、名前導入的用法（用法 H）がある。

以下の構文で、下線部の固有名は、「 x は N という名前をもつ」という述語として使用されている（金水 1986, 上林 1988, 西山 2003）

[1] 私は 山田一郎 です。（「名前は何か」という質問に対して）

[2] This is John Smith. (Bach 2002)

[1,2] は、同一性を表す文とは区別すべきである。[3] は同一性の読みとは別に名前導入的な読みをもつ。

[3] あの人は山田一郎です。

[4] あの人の¹は山田一郎²だ。彼らの_{1,2}は同一人物だ。

[5] A: 私は山田一郎です。

B: 偶然ですね、私も山田一郎です。（金水 1986）

[1] の例を論拠として、上林 (1988), 西山 (2003) は固有名の述語説を支持する。

固有名による述定と修飾

一般に、普通名詞は「NP1 は NP2 だ」という形の述定文（いわゆる措定文）の述語位置 NP2 で使われるだけでなく、「NP2 の NP1」という形の名詞修飾表現 NP2 の位置にも現れる。(西山 2003, 2013)

[1] 彼は学生だ。

[2] 学生の彼（＝学生である彼）

しかし、固有名の名前導入的用法は、述定には使えるが、修飾では使えない。

[3] 彼は山田一郎だ。

[4] *山田一郎の彼

[5] 「山田一郎」という名前をもつ彼

[6] あの川は相模川だ。（＝あの川は「相模川」という名前だ）

→ *相模川の川（「相模川という名前の川」）

[7] この会社は任天堂です。（＝この会社は「任天堂」という社名だ）

→ *任天堂の会社（「任天堂という社名の会社」）

V. 呼びかけと二人称用法

固有名と普通名詞は、呼びかけ（用法 I）と二人称的用法（用法 J）の使い方に関して顕著な違いがある (田窪 1997)

- 固有名はつねに呼びかけに続いて二人称的に使うことができるが、普通名詞は親族名・役割名の一部しか使われない。
- また、普通名詞を二人称的に使う場合、「～さん」などの敬称が必要となる。固有名は敬称があってもなくてもよい。

[1] 山田、山田はどう思う？（固有名）

[2] 山田さん、山田さんはどう思いますか。（固有名＋敬称）

[3] 先生、先生はどう思いますか。（上位の職階を表す普通名詞）

[4] *学生、学生はどう思いますか。（下位の職階を表す普通名詞）

[5] ?学生さん、学生さんはどう思いますか。（普通名詞＋敬称）

[6] お客さん、お客さんはどう思いますか。（役割を表す普通名詞＋敬称）

[7] *画家、画家はどう思いますか。（普通名詞）

An alternative view

- 固有名の primary な用法は指示的用法（用法 A, B）であり、述語的用法はコアーション（メトニミー）により生じる (cf. Jeshion 2015)

$\lambda x.R(\textit{aristotle}, x) : \textit{et}$

|
 $\textit{aristotle} : \textit{e}$

- どのようなコアーションが可能であるのかは固有名が現れる環境・共起する述語により決まる（argument realization の問題）
- 引用的用法（用法 G）は独立に認める必要がある（どのような統語カテゴリの表現にも必要）
- 固有名がメタ言語的述語として解釈される場合、引用的に解釈された固有名に対してコアーションが起こっているのではないか。 (cf. 和泉 2016:49)

$\lambda x.R(\textit{'aristotle'}, x) : \textit{et}$

|
 $\textit{'aristotle'} : \textit{e}$

- コアーションの型理論的な意味論 (Asher 2011, Kinoshita et al. 2016)

まとめ

- I. 時間・状況限定的用法をどう扱うか
- II. 隠喩的用法をどう扱うか
- III. 普通名詞的用法の多くが marked であるのはなぜか。BCCWJ の調査が示す使用頻度の差はなぜ生じるのか。
- IV. 名前導入的用法が修飾的に使えないのはなぜか。
- V. 二人称用法に関して固有名と普通名詞に違いがあるのはなぜか。

他の問題

- Nominal restriction + 状況意味論の問題点 (峯島 2013)

わからないこと

- 固有名の名前導入的用法は述定には使えるが、修飾には使えないのはなぜか（「あの人は山田一郎だ」 vs. 「*山田一郎の人」）
- 反事実的条件文に現れる「固有名＋数量表現」はなにか。

Reference I

- Asher, N. 2011. *Lexical Meaning in Context: A Web of Words*. Cambridge University Press.
- Bach, K. 2002. Giorgione was so-called because of his name. *Noûs*, 36 (16), 73–103.
- Burge, T. 1973. Reference and proper names. *The Journal of Philosophy*, 70 (14), 425–439.
- Elbourne, P. 2005. *Situations and Individuals*. MIT Press.
- Fara, D. G. 2015. Names are predicates. *Philosophical Review*, 124 (1), 59–117.
- Jeshion, R. 2015. Referentialism and predicativism about proper names. *Erkenntnis*, 80 (2), 363–404.
- Katz, J. J. 1977. A proper theory of names. *Philosophical Studies*, 31 (1), 1–80.
- Kinoshita, E., K. Mineshima, D. Bekki 2016. An analysis of selectional restrictions with Dependent Type Semantics. In *Proceedings of the 13th International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS13)*. 100–113.
- Matushansky, O. 2006. Call me Ishmael. In *Proceedings of Sinn und Bedeutung*. 9, 226–240.
- Paul, M. 1994. Young Mozart and the joking Woody Allen: proper names, individuals and parts. In *Semantics and Linguistic Theory*. 4, 268–281.
- 金水敏 1986. 「名詞の指示について」, 『築島裕博士還暦記念国語学論集』, 明治書院, 467–490.
- 上林洋二 1988. 「措定文と指定文：ハとガの一面」, 『筑波大学文藝言語研究・言語篇』, 14, 57–74.
- 西山佑司 2003. 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』, ひつじ書房.
- 西山佑司 (編) 2013. 『名詞句の世界』, ひつじ書房.
- 田窪行則 1997. 「日本語の人称表現」, 田窪行則 (編) 『視点と言語行動』, くろしお出版, 13–44.
- 飯田隆 2000. 「日本語形式意味論の試み—名詞句の意味論—」, 『日本語と論理学』, 科学研究費補助金研究成果報告書.
- 峯島宏次 2013. 「自由拡充をどのように制約するか」, 『名詞句の世界』, ひつじ書房, 513–557.
- 和泉悠 2016. 『名前と対象』, 勁草書房.